『漢語大詞典』では「①即斗柄」と説明し、『淮南子』「天文訓」の「斗杓爲小歳高誘注斗第五至第七爲杓」の例を引く。又「②比喩爲人所敬仰者或衆人的引導者」の説明も付す。前掲の柳澤良一氏に詳細な説明と考察がある。（注3）

三

二章で、この句の語釈を通して、全句の解釈を試みたが、この章では、更には七・八句目「偏憑延喜開元暦、東北廻頭拜斗杓（偏に　延喜元暦を開くを憑み、東北に　頭を廻らして斗杓を拜せしを）」の解釈をめぐって試論を提起したい。次の二点を主論点として考察を深める。

㈠『菅家文草』「278　立春　在十二月廿六日」との比較を通して見えて来るもの

㈡『菅家後集』「492　元年立春　十二月十九日」（本稿対象作品）前後の漢詩群を通して見えて来るもの

この二句については、岩波古典文学大系本で川口久雄氏が頭注で記されている

「延喜と改元されて、世の中の気分が一新した―このことに私は運命をかけて楽しみにしている。私は東北のかたに、京都の空をはるかにふりさけてみて、北斗の柄にあたる三星を心をこめて拝する。立春には北斗の杓即ち柄は東を指す。これは人心一新とともに、あるいは勅赦があるかとはかなくも期待したのであろう」

を始めとして管見の先学の論文は、ここで隋源遠氏の言を借りるならば

「〈元年立春〉詩の尾聯は、延喜開元の世界から除外されたにも関わらず、その新暦を頼りに、忠義を貫こ